
三国恋戦記 二次小説 ~黄昏の口付け~

クレハ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国恋戦記 一次小説 ～黄昏の口付け～

【Zコード】

Z7595

【作者名】

クレハ

【あらすじ】

乙女ゲーム「三国恋戦記 ～オトメの兵法～」の一次小説です。花×孔明のカツプリングで、孔明エンド後のお話になります。キヤラクターの雰囲気が壊れないよう気をつけたつもりですが、なにぶん稚拙な文章しか書けないので不快な思いをさせてしまった申し訳ありません。内容的にはそれほど甘さはありませんが、ほのぼのとした感じが出ていれば嬉しいです。

(前書き)

乙女ゲーム「三国恋戦記～オトメの兵法～」の一次小説です。
花×孔明のカップリングで、孔明エンド後のお話になります。
キャラクターの雰囲気が壊れないよう気をつけたつもりですが、
なにぶん稚拙な文章しか書けないので不快な思いをさせてしまった
ら申し訳ありません。

内容的にはそれほど甘さはありませんが、ほのぼのとした感じが出
ていれば嬉しいです。

「師匠、 いの書簡は渡しますか？」

「ああ、仕分けしてそつちに置いといておくれるかな。それが終わつたら休憩していいよ」

「はー」

師匠と想いが通じ合ひて、 いの世界に残ることを決めたあの日から数日。

心の片隅にあつたもやもやはすつかり消え失せ、
相変わらず師匠の補佐として忙しく働く日々が続いていた。

恋人同士の甘い雰囲気・・・・・といつ風なものはあまりないけれど、

師匠と一緒にいられる、それだけで私はとても幸せだった。

（本当、なんだか幸せすぎて怖いな・・・・・。

師匠のことで悩んでいた時は、まさかこんな日が来るなんて思いもしなかった）

（だけど、あの時・・・・・師匠が私を想ってくれていたってわかつて、

私も師匠に好きだつて言つて ）

「…………」

急にその時の情景が鮮やかに思い出され、私の頬は自然と熱くなってしまった。

(う…………だめだめ。仕事に集中しなきゃ…………)

「花」

「は、はいっ！？」

顔を上げると、すぐさまに師匠が立っていて私は必要以上に驚いてしまった。

「どうしたの、そんな幽霊でも見たような顔して。…………あれ？ ちょっと顔赤い？」

「き、気のせいです。別に師匠のことを考えたとか思い出してたとかじやなくて」

「思に出す？」

(わっ…………口が勝手に…………)

「あ、あの、とにかくなんでもないですから」

「…………ふーん、そつかそつか。ほんと、君はかわいいなあ

(う…………み、見破られた…………?)

いつものように余裕の笑みを浮かべる師匠に、恥ずかしい気持ちと同時に
ちょっぴり腹立たしくなる。

「うん。じゃあ行こうか」

（私なんて師匠の言動に振り回されてばっかりなのに・・・・）

「さてと、仕事もひと段落ついたことだし休憩しようつか。
ボクはちょっと外に出るけど君はどうする？」

「あ、私も一緒に行きます」

師匠の後に続いて行くと、そこは中庭だった。

もうだいぶ日も暮れてきて、綺麗な夕焼けが空を覆っている。
私と師匠は一人並んで芝生に腰を下ろした。

「ふわあ～、今日もなかなか忙しかったな。疲れた？」

「あ、はい、ちょつとだけ。でも大丈夫です」

「君は何を聞いてもその一言で片付ける癖があるからなあ。頑張るのはいいことだけど、

疲れた時は無理せずにちやんとまつりなんだよ?」

「はー」

(無理…………かあ。そういうえば師匠って疲れたとか眠いとかはよく言ひなけど、それ以外の愚痴ってほとんど言わないな)

「…………師匠…………あんまり無理はしないでくださいね。私じゃまだまだ頼りないかもしねないですけど、もつと師匠の役に立てるよう頑張りますから」

「君は十分役に立ってるよ。もつと自分に自信を持ちなさい」

「…………ありがとうございます」

「でも、あんまり君が優秀になつて追い越されても困るなあ。師匠としての立場がなくなるよ」

顎に手を当てながら師匠が冗談っぽく言つた。

「つねばかり…………私に師匠が追い越せるわけないじゃないですか」

「そうでもないかもしれないよ? 何が起こるかわからないのが人生だからね」

「君があの本に導かれてこの世界へやつて来て、ボクは『君』と再会を果たし、君は『ボク』と出会つた。9年の時を超えた邂逅なんてそういうあ

「ひどいだろ？」「もんじやないだろ？」

「まあ確かに、それはそうですが……」

ふと、私は以前から気になっていたことを師匠に聞いてみることにした。

「…………師匠。師匠って、どうして今みたいになつたんですか？」

「んー？ どういう意味？」

「えっと・・・その、なんと言ひか、亮くんとは雰囲気も口調もだいぶ違ひなあつて思つて。

「それって、今のボクは真面目じゃないってこと？」

「そ、そういうわけじゃないんですけど、何があつて今の師匠になつたのか気になつて・・・・・・」

否定も肯定もできるような質問にあたふたしながら私が答えると、師匠は軽く溜め息をついた。

「ま、いいけどね。ショウちゃん、ひらひらしてるのは事実だし」

「それでさあ、その質問だけじゃ、まあボクにも色々とあつたつて」と
だよ。

時代が流れていくように、人も移り変わる。すべてが同じままでいられる人間なんていないよ」

「…………」

(時代が流れていくよつて、人も移り変わる…………か)

(人が同じままではいられないなら、今のこの師匠への気持ちも、いつかは変わっちゃうってことなのかな)

(そんなのいやだ。)の気持ちだけは変わらないって、信じてる

(…………自信がある。きっと、絶対に、私はずっと歸匠のこ
とが好きだ)

「…………でも、変わらないものだつてありますよね

「やうだね。ボクの君に対する想いとか」

「…………し、師匠つー！」

「あはは、真つ赤だよ。君が夕焼けみたいだね」

師匠が楽しそうに笑い、反対に私は恥ずかしくて居たたまれなくな
つた。

(うう…………やつぱり余裕だ)

「…………歸匠つて、いつもやうですよね」

「ん?」

「飄々としてるつていうか、どんな時でも動じないし、余裕があるじゃないですか」

「余裕？ そうかなあ」

「そうですよ」

「…………」

私が頬を膨らませながらそう言つと、師匠はふいに空を仰いで小さな声で呟いた。

「…………余裕なんか、本当はないよ」

「え…………？」

普段とは全く違つ聲音に驚いて師匠を見遣ると、その横顔はどこか物憂げだった。

「君とこると、余裕でなんかいられない。そう見えるんだとしたら、それはそう見せかけてるだけだ」

「ボクは君の師匠だけど、同時に一人の男でもある。

…………言つてる意味、わかる？」

「…………師匠」

思いもよらない言葉が返ってきて、思わず師匠をまじまじと見つめてしまつ。

と、その時 ふいに私の視線と師匠の視線が交差した。

心臓がドクンドクンと音を立てはじめ、鼓動が速くなる。

「あ、あの…………師匠…………」

「何?」

「その…………え、っと…………」

（び、び、びよつ。なんか、声が震える…………。）

師匠がそんな風に真っ直ぐ見るから…………）

「…………」

何とも言えない微妙な沈黙が流れ、やがて先に口を開いたのは師匠のまうだつた。

「…………君が黙つてるなら、ボクから先に言おうかな」

そつ言つと、師匠の手がそつと私の髪に触れてきた。

そのまま優しく髪を撫でられ、その指がゆつくりと顎を持ち上げる。吐息がかかるくらいすぐ間に師匠の顔があり、それだけでもう心臓は爆発寸前だつた。

「…………逃げたいなら、今のうちに逃げるとい。

もひとつ、この手が放せるかどうかボクにもわからないけどね」

「…………」

「…………どつするへ、」

「…………そ、んなの…………」

師匠はざるい、と思つた。

そんな風に甘く囁かれて、嫌だなんて言えるわけがない。思つはずがない。

だつて私は いんなにも師匠のことが好きなのだから。

音もなく口が沈んでゆく中で、柔らかな風が吹く。

それはまるで追い風のように私と師匠の距離を一気に縮めた。

「…………ん…………」

とても温かくて、優しい口付けが交わされる。

これまでにないくらい師匠のことを近くに感じられて、その幸福感に田が眩みそうだった。

（まるで、唇が触れあつてこるとこから想いが溢れてくるみたい・
・・・・・）

（もう、私には師匠しか見えない。きっとこの先も、ずっと
・・・・・）

長い長いキスの後、どちらからともなく唇を離し、私は師匠の胸に寄り添つた。

「…………師匠」

「どうしたの？」

優しい眼差し、優しい声、師匠の体温。それらをすぐそばで感じているのに、自然と私の口からは言葉が溢れ出た。

「大好きです。…………孔明さん」

「」

師匠の黒い瞳が一瞬大きく見開かれ、だけどそれはすぐに穏やかな笑顔に変わった。

「…………ほんと、君には参るよ。9年前からずっとそいつだ。ボクの心を惹きつけて離そうとしない」

「だから、ボクも君を離さない。…………君が望む限り、君がボクの隣で笑つてくれる限り、ボクはいつまでも君のそばにいるよ」

「…………好きだよ。花」

そうして、私たちは2度目のキスを交わした。

お互いの想いを確かに感じながら、いつまでも

・・・・・

(後書き)

花と孔明のお話はいかがでしたでしょうか？ 少しでもお楽しみ頂ければ本当に嬉しいです。
ご意見・ご感想などもお待ちしておりますのでお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n75951/>

三国恋戦記 二次小説～黄昏の口付け～

2010年10月11日15時35分発行